2023 年　文学部学外活動応援奨学金　報告書

フランスにおける近代の女性ファッションに関する調査

文学部　西洋史学専攻　4 年
西田梓

■採用コース: 文学部学外活動応援奨学金 C コース（300,000 円）
■実施計画内容:「フランスにおける近代の女性ファッションに関する調査 」
■実施調査目的地：フランス、パリ
■調査期間:2023 年 9 月 21 日(木)～2023 年 9 月 29 日(金)

１．活動目的

私は、中央大学文学部の学外活動応援奨学金制度を利用し、2023 年 9 月 21 日から 29 日にかけてフランスのパリにて自身の研究の調査活動を行った。

私は幼い頃からヨーロッパの歴史や文化に興味があり、大学で専門的に学びたいと考えた結果、中央大学の西洋史学専攻に進学した。進学後、フランスの文化史を中心に勉強する中で、19 世紀末～20 世紀初頭にかけて女性のファッションが著しく変化していることを知った。また、そこには女性の社会進出が大きく関係していることが分かり、非常に興味深いと感じた。そこで私は卒業論文のテーマを「近代ヨーロッパにおける女性ファッションの変化と女性の社会進出」と定めた。

卒業論文の執筆に向けて準備を行うなかで、日本では当時の女性ファッションに関する史料の収集に限界があると感じていた。そのような時、2023 年にフランスのパリにて女性ファッションの変遷をテーマとした特別展が行なわれることや、服飾に特化した美術館、フランスの歴史的な史料を収集した図書館が存在することを知った。これらの施設で一次史料を収集し、卒業論文の執筆に大いに活かしたいと考えていたところ、担当の先生から文学部学外活動応援奨学金の存在を教えていただき、応募することを決めた。

２．日程

9 月 21 日(木)　日本出国
　　ベトナムにて乗り換え
9 月 22 日(金)　フランス到着
　　パリ市内散策
9 月 23 日(土)　パリ装飾美術館　見学
9 月 24 日(日)　ガリエラ美術館　見学
9 月 25 日(月)　歴史図書館にて史料閲覧
9 月 26 日(火)　オルセー美術館　見学
9 月 27 日(水)　フランス出国
9 月 28 日(木)　ベトナムにて乗り換え
9 月 29 日(金)　日本到着

３．施設

〇パリ装飾芸術美術館

ルーヴル美術館の隣、パリを東西に貫く大通り Rivoli（リヴォリ）通り沿いに位置し、1905 年に開館した美術館。内装工事と修復を終え 2006 年に再オープンした。100 年以上もの歴史を誇り、約 15 万点ものコレクションを収蔵している。中世から現代まで、人々の生活の中で慈しまれながら使われていた装飾品が展示されている。訪問者は年代順にコレクションを探索し、中世から現代までの装飾芸術の膨大なコレクションを見て、技術の発展と美の考え方の変化を理解することができる。

パリ装飾芸術美術館では、ファッションやモード関係の特別展が期間ごとに開催される。2023 年 9 月 20 日から 2024 年 4 月 7 日まで、2024 年のパリ・オリンピックに合わせて、ファッションとスポーツに関する特別展を開催している。

〇パリ市立ガリエラ美術館

19 世紀、ガリエラ公爵夫人が自身の美術コレクションを展示するために、パリの 16 区に建てたイタリア・ルネッサンス様式の宮殿で、現在はモード企画展専門の美術館となっている。作品と宮殿は寄贈され、1977 年、パリ市はこの場所をファッションと衣装の美術館にすることを決定した。18 世紀ルイ王朝時代から現在のオートクチュールまでの衣装やアクセサリーが展示されていて、20 万点を超えるコレクションが収蔵されている。

現在、ガリエラ・モード美術館では常設展は今はやっておらず、特別展や企画展のあるときのみ開館している。2023 年 6 月 16 日から 2024 年 3 月 15 日まで、「LA MODE EN MOVEMENT」という特別展が開催されている。この特別展では、女性服の男性化・実用化の変遷について知ることができる。

〇パリ市立歴史図書館

パリ市歴史図書館はマレ地区にある史料館。貴族の館であるラモワニョン館を改装して 1969 年にオープンした。専門的な公共図書館で、パリとイル・ド・フランス（北フランス）の歴史、政治、宗教、社会、文化に関する 200 万点以上の資料を所蔵している。書籍だけでなく、版画、地図、写本、図面、新聞、写真、ポスターなども所蔵しており、パリの歴史を学びたい人とっては貴重なアーカイブ施設といえる。

〇オルセー美術館

1900 年のパリ万国博覧会のために建設されたオルセー駅を改造して、1986 年に美術館としてオープンした。オルセー美術館は、1848 年以降から第一次世界大戦のはじまった 1914 年までの作品が展示されており、19 世紀の近代美術専門の美術館である。この時期、パリは世界の文化やアートの中心的存在であり、印象派、ポスト印象派と近代アートの基となり、

現代アートに大きな影響を与えてきた作品の数々が、ここオルセー美術館に展示されている。また印象派の画家の作品が数多く所蔵されていることから、印象派美術の宝庫とも呼ばれる。

４．活動内容

○１日目【9 月 21 日(木)】

午後過ぎに羽田空港に到着し、昼食を済ませた後に、早々にチェックインを行い、手荷物を預けた。約 1 年前に羽田空港で国際線を利用した時よりも圧倒的に利用者が増えており、海外渡航の制限が解除されたことを身を持って実感した。16 時 35 分に羽田空港を出発し、ベトナムのハノイ国際空港に現地時間の午後 8 時前に到着した。ベトナムは物価が安いと聞いていたのだが、空港内のためか、物価は日本と同じ、物によっては日本以上に高く、少し驚いた。

約 3 時間半のトランジェットタイムを過ごし、現地時間の午後 11 時 45 分にハノイ国際空港を出発した。飛行機内で娯楽を楽しみたかったが、パリ到着時間が早朝だったため、到着まで睡眠をしっかりととることにした。

○２日目【9 月 22 日(金)】

約 13 時間のフライトを経て、午前 7 時過ぎにパリ=シャルル・ド・ゴール空港に無事に到着した。小雨が降っており、また空港周辺の気温は 13℃だったため、残暑が続く日本から来た私は非常に寒く感じた。

パリ市内に向かうために電車のチケットを購入しようとしたが、券売機の使用方法が分からず困っていたところスタッフの女性が助けてくださり、無事に購入することができた。しかし困難は多く、駅には複数の改札があり、どこから入ればいいか分からず迷っていると、旅行客であろう男性が丁寧に教えてくださり、私は無事に電車に乗ることができた。

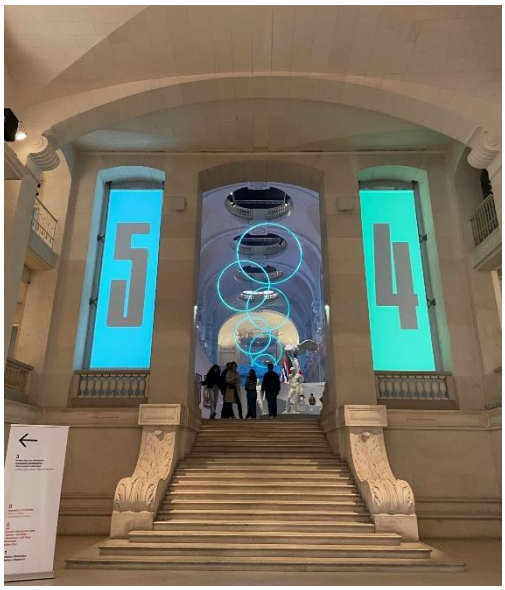
約 45 分かけてパリ市内に到着し、ホテルで荷物を預けた後、街を散策することにした。パリ市内には、日本の観光雑誌やインターネットには掲載されていないであろう、教会が多く存在した。しかもその多くが無料で入場することが可能だった。街の中に教会が点在し、溶け込んでいる様子は、普段日本で暮らしている者からするととても珍しく感じられ、またフランスはキリスト教の国なのだと強く実感した。しかしよく思い出せば、日本でも大都会の中にも神社やお寺は多く存在していることに気が付いた。日本に訪れた外国人も、街中にこんなに多くの神社やお寺があることにきっと驚いているだろう。

○３日目【９月 23 日(土)】

この日はパリ装飾芸術美術館に訪れた。あの有名なルーヴル美術館の隣に位置する装飾芸術品に特化した美術館である。この美術館では、2024 年のパリ・オリンピックの開催に伴って、女性のスポーツウエアの歴史に関する特別展が行なわれていた。19 世紀末まで、

多くの女性はコルセットでウエストを締め付け、足首まで隠れる長いドレスを着用していた。しかし 20 世紀初頭、女性たちは重く動きにくいドレスから、実用的な服を着用するようになった。そんな女性服が大きく変化した出来事の一因としてスポーツの普及が挙げられる。19 世紀、産業革命によって働き方に変化が起こった結果、余暇の概念が登場した。そして、19 世紀後半以降、新しいスポーツが誕生し、女性もテニスやサイクリング、ゴルフや乗馬など「余暇」を楽しむようになった。しかし上記の通り、19 世紀末までの女性服は美しく装うことを重視しており、スポーツウエアとして着るには大変不都合であった。そこで彼女らはスポーツをやりやすいように、最初は男性服を真似たりすることで 女性服を少しずつ改良し、過度な装い、重い布地、窮屈なスタイルを排除した機能性の高いスポーツウエアを作り出した。これは服装改革の第一段階と言えるだろう。私は、実際に当時どのようなスポーツウエアが着用されていたのかを知るために、パリ装飾芸術美術館を見学することを決めた。

開館時間よりも前に美術館に到着したのだが、入口には 20 人程の列ができていた。日本の観光雑誌などで紹介されていることも見たことがなく、きっと空いているだろうと予想していたのだが、それは外れた。受付でチケットを購入し、特別展のほうへ向かうと、壮大な入口が待っていた。天井から吊り下げられている 5 つの光る丸たちはオリンピック・リングを表現しているのだろう。展示は 8 つのテーマに分けられていた。その中から、気になった展示品をいくつか取り上げる。



1867 年、アーチェリーをする女性たちの様子を描いた絵である。女性たちが着用しているドレスは、通常のものより装飾が控えめではあるが、コルセットでウエストを締め付け、またクリノリンを使用しスカートのボリュームを出している。アーチェリーは身体を激しく動かすスポーツではないにしろ、スポーツウエアとしては不適切だろう

1895 年、サイクリングをする女性を描いた作品である。この時期、サイクリングは若い女性の間で非常に流行したスポーツだったらしい。服装に注目すると、女性のスカートの丈が短くなり、脚が一部見えるようになっている。当時の価値観では、女性が脚を見せることはタブー視されていた。しかし足首まで覆う長いスカートで自転車に乗ると危ないため、裾をすぼめた短めのズボンが考案され、女性たちに受け入れられた。しかしコルセットは健在のようだ。

1912 年、オリンピックのテニスで優勝した女性の写真である。着用してるスポーツウエアの素材はとても軽く、動きやすそうで、コルセットは付けてないように見える。しかし、この時代はまだ女性が脚を出すことへの風当たりは強かったため、スカートの丈は長い。

1929 年、女子フットボールチームの集合写真である。女性たちはショートパンツを履き，脚を出していることが分かる。この写真に限らず、1920 年以降は、ショートパンツを履いている女性の写真が圧倒的に増えている。現代のスポーツウエアとほぼ形は変わらず、ようやくスポーツに適する服が作られた。しかし、まだ当時は女性がこのような格好をするのは「男性化」として捉えられ、否定された。

女性のスポーツウエアが現在と同じ形になるまで半世紀以上かかっている。当時は、女性はコルセットを付けスカートを履き、脚は隠すことがマナーとされていた。その中で、女性がスポーツを楽しむために、服が少しずつ改良されていった。そして、この流れは普段着の改良にまで繋がっていった。

○4 日目【9 月 24 日(日)】

エッフェル塔の近くにあるガリエラ美術館に訪れた。この美術館を取り扱っている日本語サイトが非常に少なく、下調べに少々苦労した。ガリエラ美術館では「LA MODE EN MOVEMENT」という特別展が行なわれていた。女性服の男性化や実用化に関しても展示されていることが下調べで分かった。19 世紀末までの女性服は、女性を養う夫や父親の経済力を誇示するために派手な装飾がなされた。重たいドレスや身体を締め付けるコルセットは働かなくてよい立場の女性であることや夫の社会的地位や経済力の象徴としての役割を担った。当時、「女は家庭、男は仕事」という性別的役割分担論が主流で、女性が家庭外で働くことは非難された。庶民の爺もコルセットを着用していたのだが、庶民用のものは一人で着脱できる前締めタイプだったのに対し、貴族や中流階級の女性が着用したコルセットは使用人の助けが必要な後ろ締めタイプと決まっていた。20 世紀初頭以降、女性の社会進出が進み働く女性が増えると、簡素化されて動きやすい現代服に近づいていった。コルセットや長いスカートは、労働に不適切であることから退行していき、機能性・合理的を追求した服が求められるようになった。実際に着用されていた服を見るために、ガリエラ美術館に訪れることを決めた。

美術館はパリ中心部の喧騒から離れた閑静な住宅街にあった。入口が分からず、周辺を少し彷徨ってしまったが、無事に受付まで辿り着きチケットを購入することができた。展示は年代順に分けられており、時代ごとの服装の変化をこの目で確かめることができた。その中から気になった展示品をいくつか取り上げる。

1900 年、女性用のテーラードスーツである。テーラードスーツは1880年代にイギリスで誕生した。テーラー（Tailor）とは元々、洋服屋または服を仕立てるという意味。デザインは女性的な花柄やレースなどが使用されておらず、男性的なシンプルで実用的なものになっている。中のブラウスは、最初は華美なものが多く見られたが、次第に簡素なものが好まれるようになった。

1910 年頃、ポール・ポワレによるアフターヌーンドレスである。ポール・ポワレは服装改革の先駆者で、コルセットを必要としない新しいドレスをデザイン・発表した。彼のデザインしたドレスは、それ以前のドレスと異なり、豊かな胸や腰、細いウエストが消え、直線に近かった。また装飾的で拘束的な服に代わって、古代ヘレニズム文化やオリエント文化に影響を受けたシンプルで緩やかなものだった。このドレスもコルセットを使用せずにスタイルを良く見せられるようにデザインしてある。1910 年代は女性の「身体の解放」が大きく進んだ時代である。

1925 年、イブニングドレスである。1920 年代、新しいモードが誕生した。それが「ギャルソンヌ・スタイル」である。「ギャルソンヌ」とはフランス語の「ギャルソン（少年)」を女性形にした言葉である。少年のようなスリムな体形を理想とし、着やすいシンプルな膝丈のドレスが街着として好まれるようになった。このドレスもウエストを強調しないＩラインのシルエットで、丈も膝辺りまで短くなっている。

今回、ガリエラ美術館で時代ごとに女性服の変化を見たことでテキスト上で見るよりも強く、その違いを実感することができた。変化の大きなポイントは、①コルセットを使用しなくなり、ウエストの強調が無くなった。 ②華美な装飾が無くなり、デザインがシンプルになった。 ③足首まであった長いスカートが膝丈まで短くなり、脚を出すようになった。実用的で快適な服が女性のファッションに取り入れられ、多くの女性に受け入れられ、女性の身体を解放した。

○ 5 日目【9 月 25 日(月)】

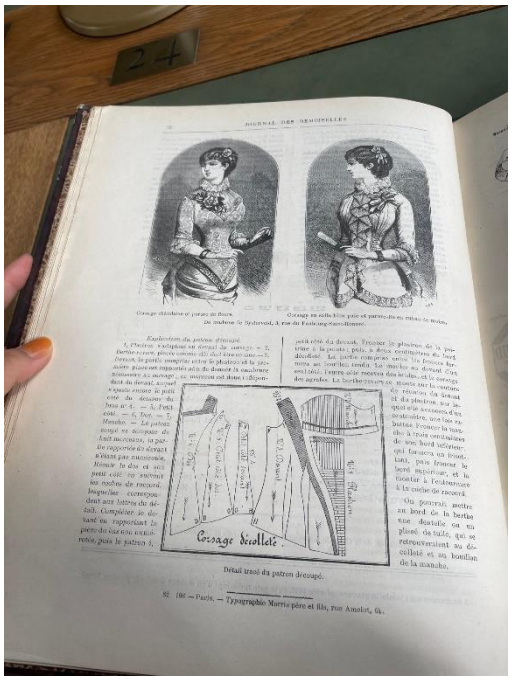
マレ地区にあるパリ市歴史図書館に開館時間に合わせて訪れた。受付の方に図書館の利用方法を尋ねると、利用するにはまず会員登録しカードを発行する必要があると説明された。担当者の方は英語を話すことができなかったが、とてもフレンドリーな方で、登録作業は問題なく終わった。その後、貴重品以外はロッカーに預け、館内に入った。意外にも、自習スペースには勉強したり、本を読んだりしている若者が多く、私もパリの学生になったような気がして胸が高鳴った。事前に調べ、選んでおいた史料を閲覧するために、職員の方に声をかけ、書庫から史料を持って来てもらった。貴重な史料を守るためだろうか、机の上に薄いクッションが敷かれ、その上で史料を閲覧するように言われた。

この図書館で、私は 19 世紀後半頃の女性向けファッション誌を閲覧した。ファッション誌では、当時どのようなファッションが流行し、またどのような女性が理想とされたのかを知ることができる。そして同時に、社会が女性に求めていたことも分かるのでないだろうか。

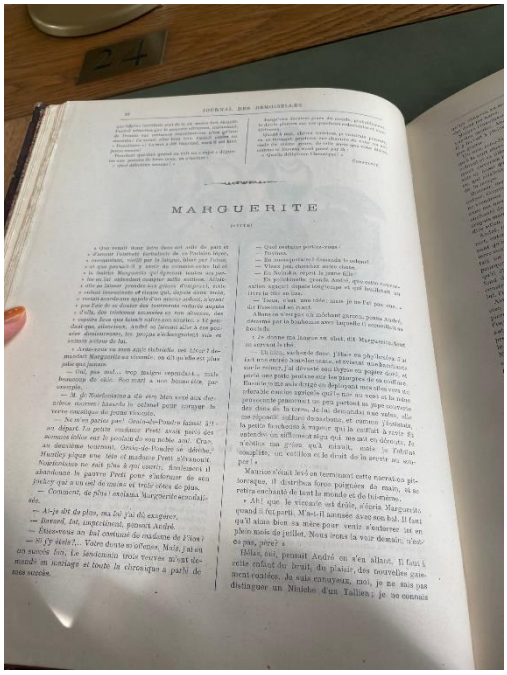
今回、私が閲覧したのは *Journal des Demoiselles* という 1833 年から 1922 年までパリで

出版されたフランスの雑誌である。この雑誌は、主に 14 歳から 18 歳の裕福層の女性を対象としている。ファッション誌として機能しただけでなく、女性が淑女として育つように教科書的な一面も併せ持っていた。私はその中でも 1882 年の上半期に発行された *Journal des Demoiselles* を主に閲覧した。その中から気になった点をいくつか紹介する。

この写真は雑誌内の挿絵を撮影したものである。女性のウエストが現実的には有り得ないほど極端に細いことが分かる。この挿絵だけでなく、雑誌に掲載されていた挿絵内の全ての女性のウエストが細く描かれていた。中には、肩幅の 2 分の 1 の幅もないウエストも存在した。また、雑誌内にはコルセットに言及した記事もあった。記事内で、「コルセットを着用することでウエストの過度な発達を抑えることできる。」という一文を見つけることができた。これらから、ウエストが細い女性が当時の女性の理想であったことが分かる。また当時の社会の中でウエストが細いことが女性のステータスでもあったように見受けられた。



これはコサージュ（女性がドレスや衣服に付ける飾り）の作り方に関する記事を撮影したものである。文章で簡単に作り方が説明されている。またどのように生地を裁断するべきか見本のパターンが掲載されている。当時、女性は裁縫ができることが必須とされていた。学校で裁縫を学ぶだけでなく、雑誌にも家庭で裁縫を推奨する記事が掲載されていることに驚いた。しかも裁縫に関する記事は、雑誌内に 5 つ以上確認することができた。



MARGUERITE

また雑誌内には、物語がいくつも掲載されていた。私はフランス語ができないため、全部を読み取ることはできなかった。現在では、ファッション誌に物語が掲載されることはほぼ無いだろう。しかし当時は、この雑誌は女性へ淑女になるための教育行う役割も担っていたため、物語も掲載されていたと考えられる。物語は数ページ毎に掲載され、ファッションに関する記事とほぼ同等の量があったように感じた。教育としての役割を担っていただけでなく、読者として楽しみにしていた女性も多かったのだろう。

○6日目【9月26日(火)】

この日は、セーヌ川沿いに佇むオルセー美術館に訪れた。チケットは事前にインターネットで購入しておいた。9月も後半でハイシーズンは過ぎているため、事前にわざわざチケットを購入しなくても良かったのでは？と考えていたが、実際に訪れるとチケット売り場には行列ができており、事前購入の大切さ実感した。さすが世界的に有名で人気な美術館は訪れる人の数が違う。館内全ての作品をじっくり見ようと思えば、1日では足りないだろうというほどオルセーは非常に大きな美術館だった。館内はかつて駅だった頃の名残が感じられ、駅として機能していた頃を想像した。

オルセー美術館は 1848 年以降の絵画を展示している。当時の女性がどのような場面で、どのような服を着用していたのか、多くの絵画を通してその情報を得られるのではないかと考えた

次のページの左側の作品はポール・シニャックによる *Femmes au puits* （井戸と女性）という 1892 年の絵画である。都心から離れた田舎の生活が描かれている。井戸から水をくんでいる女性の服に注目する。両者ともウエストが締め付けられている。コルセットは元々、貴族の女性のみが着用するものだった。しかし 19 世紀以降、コルセットは労働者階級にまで普及し、コルセットを着用することは「義務」として認識されるようになった。この女性たちがコルセットを着用しているかは作品を見ただけでは分かりかねるが、ウエストを強調した服を着ていることは確かである。

右上は 1895 年のアリスティド・マイヨールによる *Women with a parasol*（日傘を持つ女性）という作品である。スカートの丈が長いことはもちろんだが、女性が手袋を着けている。当時は、昼間に外で肌を露出することはなるべく避けたほうが良いと考えられていたためだろう。また「労働をしていない階級」ということを表している。そして帽子を被り、尚且つ日傘を持っているのは、日焼けをしないためである。当時は、女性の肌は白いことが良いとされていた。またこれも外で働かなくてよい女性である象徴だった。青白く不健康そうな肌色が良いと言われた時代もあったという。

1878 年、ジャン・ベローによる *Une soirée*（夜会）という作品である。男性が着用して

いるスーツは真っ黒なのに対し、女性が着用しているドレスはピンクや水色、白色など多様だ。男性が質素で簡素な服を着る代わりに、妻を飾り立てることで、自身の経済力を誇示した。そこにはプロテスタントの質素を美とする考え方が影響しており、男性が自分自身を飾り立てることはなかった。この絵には当時の社会がよく表れている。

○7日目【9月27日(水)】

午後2時発の飛行機に乗るために、早めにホテルをチェックアウトして、パリ=シャルル・ド・ゴール空港に向かった。パリでの滞在ももう6日目だったため、電車のチケット購入もスムーズに行うことができた。無事に空港に着き、チェックインを済ませた。シャルル・ド・ゴール空港は巨大な空港で、移動距離の長さに驚いた。短い期間ではあったが、今回の渡航でパリという街を非常に好きになったため、まだ滞在していたいという気持ちが強かった。パリとの別れを惜しみながら、飛行機に乗り定刻通りに日本に向けて出発した。

○8日目【9月28日(木)】

約11時間半のフライトを経て、現地時間の午前6時半頃、ハノイ国際空港に到着した。ハノイに到着して、1番最初に感じたのが湿気だ。湿度が低いフランスからきたため、ベトナムの湿度の高さに驚いた。次のフライトまで18時間もあったため、一旦入国審査を受け、ハノイ市内を観光することにした。28日のハノイは生憎の大雨で観光するのはかなり大変だった。しかし午後には、雨はあがり太陽を見ることができた。ベトナムで衝撃だったのはバイクの多さと信号の無意味さだ。バイクが多い国というは元々知っていたが、日本との交通量の違いを目の当たりにした。また信号がほぼ意味を成してないほど、車もバイクも人も自由に交差点を行き来しており、よく事故が起こらないなと関心したものだ。歩行者優先という概念もないため、道を横断したくて車やバイクが止まってくれるのを待つのは全く意味がない行為だった。

ハノイ市内から空港へのバスの終電が意外にも早く、夕方には空港に向かった。また出国審査を受け、無事に保安検査内に入ることができた。長い乗り継ぎ時間も楽しんだ後、現地時間24時20分にハノイ国際空港を出発し、日本に向かった。

○9日目【9月29日(金)】

成田国際空港への到着予定時刻は午前7時半過ぎだったが、約30分も早く空港に到着した。無地に入国審査を終え、荷物も受け取り、日本に入国することができた。気温と湿度の高さで、日本に帰ってきたことを実感した。

５．まとめ

活動全体を終えて、非常に充実した活動であり、また多くの成果を得ることができたと思う。自身の研究の信頼性や質をより高められる史料を多く得ることができた。卒業論文はすでに書き終えたが、今回の活動で得られた情報を大いに活用し、論文に質と厚みを持たせることができたのではないだろうか。やはり日本で研究するあたって、紙やインターネット上では得られる情報に限りがある。現地に訪れて、実際に自分の目で確かめることで自身の理解度も深めることができ、非常に有意義な活動を行うことができた。

反省点として、現地の有識者ともっとコミュニケーションを取るべきだったという点が挙げられる。フランス語は全く話せない上に、英語もスムーズにコミュニケーションを取れるほど上手ではないので、美術館の学芸員と専門的な話をするのを躊躇ってしまった。しかし、展示品の説明やインターネットからでは得られない情報を学芸員の方たちは持っている可能性がある。躊躇せずに話しかけてみれば、更に有力な情報を得ることができたかもしれない。また海外で研究をするには、語学力が必須なのだと痛感した。実際に現地に赴き自身の研究を行うという活動は、奨学生に採用されなければ経験できなかっただろう。このような機会をいただくことは人生でもう一度あると限らない。奨学生としてパリに行くことができて素晴らしい経験となった。またパリを訪れて、芸術に触れたいと強く思った。

最後に、本奨学金のエントリーシートや計画書の執筆に関してご指導いただいた石橋悠人先生、ご協力いただいた文学部事務室の方々、このような活動の機会を提供してくださった中央大学の関係者の方々に心より感謝申し上げます。